ネパールへ 医療支援

広大留学生有志ら 派遣チーム

ネパール中部で4月に起きた大地震を受け、広島市内のNPO法人や広島大のネパール人留学生有志が支援団体「広島・ネパール アースクエイク・リリーフチーム」を結成し、医療スタッフの現地派遣などを始めた。世話人代表を務める渡部朋子さん(61)は「現地はまだまだ厳しい状況。ぜひ日本の皆さんに関心を寄せてほしい」と支援を呼びかけている。（大槻浩之）

鹿児島大から派遣
ボハラさん現地報告

「衝撃忘れられない」

地震で倒壊した病院スタッフの家屋（ネパールで、ボハラさん提供）

渡部さんはNPO法人「ANT（アント）―Hiroshima」（中区）の理事長も務め、平和教育や国際協力に従事。ネパールの支援活動には約20年間携わっている。ANTのほか現地の医療環境充実を目指すNGO組織「アンナプルナ脳神経外科医療協力会（AANI）」（同）など5団体が4月末に設立した。

「リリーフチーム」から初めて派遣された鹿児島大脳神経外科特任研究員のマノズ・ボハラさん(31)（鹿児島市）が13日、広島市中区で、ネパールの被害の現状を報告した。

ボハラさんは現地大学の医学部を卒業後、2009年に来日。14年に同大大学院博士課程を修了した。今回は5月5～11日に首都カトマンズで活動し、アンナプルナ脳神経総合病院で負傷者の手術を行うとともに、空いた時間は仮設テントの設立作業なども行った。

ボハラさんの家族は無事だったが、病院スタッフの中には家族を亡くした人もいた。見慣れた建物も多くが倒壊、「衝撃は忘れられない」と語った。

ネパールの医師の割合は日本と比べると少なく、医療機器も不足している。今回は他国のボランティアや日本から届けられた機器の助けもあって手術を行うことができた。ボハラさんは夏頃に現地に戻り、医者としての一歩を踏み出す予定で、「ネパールの生活環境の向上に貢献したい」と意気込んでいる。

「リリーフチーム」からは現在1人の看護師を送り出しており、今月末にはさらに2人が医薬品などを携えて現地に向かう。

募金は郵便振り替えで同NPOの口座（01300・8・90360）。備考欄にネパールと記入する。問い合わせはANT（082・502・6304）。

◇

広島市や公益財団法人広島平和文化センター（中区）も15日から被災者への募金の受け付けを始めた。

募金箱を▽市役所▽各区役所▽平和記念資料館▽広島国際会議場▽広島市留学生会館――に設置。現金書留は広島平和文化センター国際交流・協力課へ送付。

7月30日まで。集まった募金は日本赤十字社などを通し、被災者援助のための医薬品、飲料、食料、生活用品の購入費に充てられる。

読売新聞
2015年5月16日（土）29面